
感情の名

蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

感情の名

【Nコード】

N7651V

【作者名】

蓮

【あらすじ】

西英で絞首ネタ。（俺がお前に抱くこの感情の名前を教えてください。どうしても、解らなくて。だから、知りたい）（殺すなら、殺してくれよ。なあ、早く、） pixivやブログにて同じものを投稿。絞首ネタはR15に含まれるでしょうか。その辺りが曖昧ですが、念のため。

(前書き)

絞首ネタにつき注意してください。

好きとか嫌いとか、そういう感情を超越した複雑なものがあつた。愛憎の裏返しは無関心で、けれど決して無関心になどなれなくて。けど愛と名付けるのも憎悪と名付けるのも違う気がして。ぐるぐると頭の中を占めるその感情にどんな名前を付ければ良いのか解らなくて結局思考を放棄した。

そうして今度は彼をどうしたいのか、彼とどうなりたいのか、彼に何をしたいのか、それらを考えた。けれどやっぱり答えは見つからなくて。

彼の事を頭から追い出したくても追い出せなくて、結局。

「っ……あ、」

ひゅ、と空気を吐き出しながら声を発した彼を冷めた目で見つめる。苦しそうに声を発する癖に、決して抵抗しようとはしないその理由など、アントーニヨにとってはどうでもよかった。兎に角今は目の前にある目標が達成できれば、それで。

瘦身の上に跨って白く細い首に纏わりつかせた指に強く力を入れた。ひく、と反射的に全体を震わす彼。

苦しげな声とは相反して、その表情はこちらがたじろぐぐらいの無表情だった。その瞳すら、何の感情も映してはいない。全く何も読み取れなかった。

指先に更に力を込める。いよいよ呼吸が出来なくなったのか、微かに聞こえていた風を切るような呼吸音も聞こえなくなった。それでも表情に動きはなくて、抵抗もしようとしない。

首を絞められているというのに。

国ならそう簡単に死ぬことは無いと思っているのだろうか。否、確かにその通りかもしれないが、確認された事でも無い限り、絶対

に死なない、なんていう確証は無いし、仮にもし死ななかつたとして、今この時苦しいのは変わらない。殺されそうになっているという事実は変わらない。それなのに、微かにすら動かない。

それが余計に、アントーニヨを苛立たせた。

「・・・抵抗しろや」

低く唸るように発した言葉は、殆ど無意識のうちに吐き出された本音だった。

目標　　彼を殺す事を達成させる為には、抵抗されない方が楽な筈だ。けれど何故か、抵抗されない事が酷く憎らしかった。理由などどうでもいい。けれどただ、抵抗してほしかった。死にたくはないという、ただそれだけの意思を示してほしかった。でなければ、彼の事を考えない為に行っている行為である筈なのに、今まで以上に彼を考えてしまいそうだ。

けれどその言葉にも、彼は無表情と無言（いやそもそも首を絞めているのだから声を発する事は出来ないのだけれど）で答えた。ぎり、と歯を鳴らす。

不意に頬に添えられた手に驚いて、ぴく、と肩を揺らす。表情にばかり気を取られて、気付かなかった。

ゆっくりと頬を撫でられて、その流れのまま癖のついた髪へと移動する。好き勝手させる理由は無かったが、それを止める理由も特に無かった。抵抗とはまた違うそれを、甘んじて受け入れた。

とことん優しい手つきでアントーニヨの髪の中にその細く骨ばった指を差し入れて、その髪を弄ぶ彼の意図は、全く理解出来ない。けれどまるで幼子にするかのようなそれを、振り払う事は出来なかった。やめろ、と。そう制止の言葉を口にする事すら叶わなくて。

どうして彼の事を殺そうとしていたのか、どうして彼の事を殺そうと思ったのか、それすら解らなくさせるその優しい手はけれど、酷く冷えていた。

けれどそれが、不意にぱたりと落ちた。彼の顔を見てみるとつい先程までしっかりと見えていたアントーニヨより透明感のある綺麗な緑の瞳は、その色を隠している。

気絶している。その事実を受け止めて、ふ、と指に込めていた力を抜く。その途端聞こえてきた、正しい呼吸の仕方を忘れてしまったかのような不規則な呼吸の音に、急に今までしていた事に関する全てがどうでも良くなった。

どうしてそんな行為をしてしまったのか、考えるのも面倒くさい。

「……………アーサー」

呼びかけても、当然ではあるが返事は無い。

白く細い指についてしまった指の痕をなぞる。自分でつけたものではあるが、痛々しい。先程の彼のように優しい手つきでその痕を撫でて、一種の首輪のようなそれに思わず満足感を得る。

この自分の感情に名前を付けるのは難しいけれど、この欲に名前をつけるとすればそれは独占欲か。それとも、支配欲か。いや、支配欲ならば、今この場で満たされるのはおかしいだろう。どう考えたって、先程まで優位に居たのは彼だった。いつでも殺せる立場に居たアントーニヨではなく、彼にあった。

だったら、独占欲。

独占。

嗚呼、そうか。

愛と名付けるのも憎悪と名付けるのも何だか違うと感じてしまった理由は。

「……………どつちも、か」

呟いて、未だに不規則な呼吸を繰り返す彼の肩に、自らの額を押し当てた。深く深く息を吐いて、そして吸う。

愛も憎悪も、どちらの感情もがアントーニヨの胸の内に入り込んでそして、混ざり合っごちゃごちゃになってしまっていた。だから気付けなかった。彼を愛している事に。彼を憎んでいる事に。夢から覚めて現実に戻ってきたかのようにだった。全てが嘘だったかのような、そんな。

アントーニヨ自身がつけた彼の首にあるその指の痕に、軽くリップ音を立てて口付ける。何の反応もありはしなかったが、アントーニヨにとっては意味のある行為だった。

「大嫌いや」

彼の上に覆い被さって、苦々しく呟く。彼が聞いているわけではない。寧ろ聞いていないからこそ、呟く。

「俺の思考全部奪ってくお前なんか、大嫌いや」

追い出したいのに追い出せなくて。もしこのまま彼を殺していたとしても、ずっとずっと、彼はアントーニヨの中に居座り続けたのだろう。

嫌いとか、好きとか、愛してるとか。心の中でそんな言葉を反芻する度、そんな言葉を口にする度、その想いが重量を増していくように。

どうしたって、彼の事を忘れる事なんか出来ないのだろう。嗚呼、狡い。こんなにも自分は彼の事を考えているのに、彼はきつと。

* * *

目を覚ましたら目の前に居たのは接触する事など無いのだろうと思っていた人物だった。太陽みたいに暖かくて眩しい人が、アーサーの上に跨ってそして、アーサーの首にその男性らしいしっかりと手で触れていた。

状況整理は驚く程早く、彼がアーサーを殺したがっている事はすぐに解った。

此処は自宅の筈で、その自室で睡眠を取っていた筈で。不法侵入だとか、何故此処にいるのかとか、そんな事がアーサーの頭の中を占める事は無かった。

「早く殺してくれよ」

力が全く入っていないその指に、力が込められる事を望んだ。彼はずっと何処か苦しそうな顔で、しかし冷めた目で、アーサーを見つめ続けている。

太陽に近付きすぎると解けてしまう。何処かの神話では、蠅で出来た翼で太陽に近付こうとした者が、その熱さで翼を溶かされ落ちて死ぬ、なんていう話があった。このまま彼の傍に居続けたら、きっとアーサーも。

それならば、溶かされる前に早く殺してくれればいい。別に自殺願望があるわけでも、死にたいわけでもない。ただ、殺してくれるのが彼なら。

次第に込められていく力に、アーサーは安心した。段々と酸素が足りなくなつて、喘ぐように空気を求めた。けれどそれは本能でしたことだ。別にアーサーが意図的に行つたわけではない。

「っ………あ、」

小さく声を漏らす。息を切るような呼吸を繰り返した。どうせならそれも出来ないくらいに強く押さえてくれたら。

どうしても生きていたいわけではないし、いつか不意に死んでしまったらそれまでだろうと割り切る。それだけの事で、それ以上でもそれ以下でもない。

彼に対し恋慕の念を抱いているわけでも、敬愛しているわけでもないけれど。

無感動に彼を見返す。相変わらず、彼が殺されかけてでもいるかのような苦しげな表情をしている。

強く力を込められて、反射的にひく、と身体が反応した。いつまでも決定的な力を込めない彼に、もどかしさが募る。躊躇ってでもいるのか。それとも予兆を楽しんでいるのか。

殺すのなら、早く殺してくれればいいのに。でないと余計な事を考えてしまう。例えば、自分が死んだ後彼はどうするのだろうか、誰か一人くらいは、気に掛けてくれるのだろうか、とか。

ぐ、と更に力が込められ、いよいよ呼吸が出来なくなってからやっとかと安堵した。

急速に思考が鈍っていく中、見えたのは傷付いたような苛立ったような、そんな複雑な表情をした彼だった。

「(なんで、)」

心の中で問い掛ける。それが彼に届く事は無く、消化しきれないわだかまりとなってアーサーの胸の内を侵した。

「・・・抵抗しろや」

アーサー以外には決して聞かせないだろう低く獣が唸るような声で呟かれて、アーサーは思わず鼻で笑いたくなった。生憎息が出来ないせいでそれは叶わないが。

この男は何を言っているのか、と。殺そうとする相手からの抵抗を望むなど、どこかおかしいのではないのか。否、国という存在であるアーサーを、この安穩の時代に、しかもこうした手段で殺そうとする時点でおかしいのだろうか。それにしただって。

この男が何故アーサーを殺そうとするのかは全く解らない。だからこそ、どうして抵抗を欲するのも解らない。そんな事はどうでも良かったし、知りたいとも思わないけれど。

どうしてか、アーサーは気付けばアントーニヨの頬にそっと触れていた。

触れた頬は驚くくらいに熱かった。単純に、アーサーの手が冷ただけかもしれないが。やはり彼は太陽だ。そう再認識して、けれど何故か触れるのはやめられなかった。

太陽に近付いたら溶ける。触れるだなんて以ての外だろう。既に火傷はしているけれど、このままでは焼かれてしまう。嗚呼、けれど今、焼かれている最中かもしれない。彼に、「太陽」に、殺されかけている。焦げていく自身を感じて、しかしそれは何故だか妙に心地が良かった。自分と正反対の、自分にはまるで遠い存在に焼かれて死ぬ。最高ではあるまいか。

頬からその跳ねて癖のついた髪の毛へと指を差し入れる。髪の毛までが温かい。

ぼんやりと霞む意識と、揺れる視界。その揺れる視界の端で、指へ込められた力は微塵も緩まないのに戸惑ったように歪んだ表情を見た。

そうして沈む意識と共に国の死というものに思いを馳せた。

* * *

意識が浮上したのは窓の外が黒く移り変わりかけている時刻だった。

そうしてまず最初に感じたのは、生きている事に対しての違和感。意識を手放す時、確かに彼の指が自分の首を絞めつけていた筈で。どうして生きているのかとか、そんな疑問は浮かんでこなかった。考えられるのはアーサーが意識を手放したすぐ後に、その指に込めていた力を緩めたのだらうという事だけだ。

結局殺してはくれなかったのか。少しだけ残念に思う自分が居て、アーサーは苦笑した。

そして目を覚ましたその瞬間から感じていた重量感の元に視線を遣る。彼が身体の半分以上をアーサーの上に乗せて眠りこけていた。それはそれは、穏やかな寝息を立てて。

今のアーサーは彼に頭を抱え込まれているような形で、何故そのような事になったのか、それだけは本気で解らなくてそして、この日初めて気になった事だった。

「お、も・・・」

力もそんなに無く痩身なアーサーにとって、成人男性（しかも体格も男性らしいしっかりとした体つきをしている）の重量は厳しかった。よくもまあこんな状態で今まで自分は平気だったものだと思う。幾ら気絶していたとはいえ。

押し掛かってきている彼を5分ほどかけてやっとの事でよけて、しかし解けない腕に身を預けて、顔のすぐ横にある彼の頭へと触れる。体制的に辛かったため寝返りをうつが、それでも解けない腕は寝ているのにどれだけ力を込めているのか。

触れた髪の毛は、相変わらず温かかった。柔らかくて、温かくて、癖があつて。自分のとは正反対なそれに、思わず鼻を摺り寄せる。晴れた夏の日によく匂うあの落ち着く香りがするかと思っただけれど、

意外とそうではなかった。土の匂いと、汗の臭い。決していい香りではない筈なのに、やけに彼らしい匂いでどうしてか落ち着いた。

これだけ動き回っているのに少しも起きる気配の無い彼に呆れる。きゅるる、とやけに可愛い腹の虫が鳴って、苦笑した。自宅に着くなりベッドに転がり込み眠りについたアーサーは、昨日の夜から何も口にしていない。だが全くもって豪快でも盛大でもなく小さく可愛らしい音を発した腹は空腹を訴えているくせに、アーサー自身に空腹だという自覚が無かった。その感覚が無い。

しかしまあこれ以上何も食べないのも健康に悪いだろうと判断して、強い彼の拘束から抜け出そうともがく。だがその腕がアーサーの頭を外す事は無くて、どうしようかと少しの間考えた後、結局紳士にあるまじき行為ではあるがこの際仕方が無いと頭を彼の腕から抜く事にした。腕の拘束が外れないなら、下から抜けばいいのだ。

そうして何とか彼という縄から抜け出して、ベッドから降りる。アーサーの使っているベッドはダブルベッドではないが、シングルベッドというにはあまりに大きいため二人が寝ても（流石に狭くはあるが）寝相が悪くない限り落ちない。

「……痕、ついてやんの」

部屋に備え付けてある等身大の鏡に身を映してぼつりと呟く。首にくつきりと残ってしまった指の痕を見て、まるで首輪のようだと嘲笑する。太陽を沈めて代わりに昇った偽の太陽が、本物の太陽に首輪をつけられる。何とも滑稽な話ではないか。

生憎アーサーは、首輪をつけられて誰かに従うような従順な性格はしていないけれど。どちらかといえば飼い犬の手を噛むタイプだ。特に相手が彼だというのなら。

その首輪に触れて、まだ熟睡している彼を見る。

「……俺だってお前なんか大嫌いだよ、ばあか」

大人げも無く、夢の中で彼に言われた台詞を未だ寝ている彼に返した。

(後書き)

西英の数が少なすぎて私は泣きたい。

ともあれ、初投稿でした。初投稿がこれというのもどうかという気はしますが。

西 英に見えますが実は西 英。西は英の事が意識の中にずっとあって、だから消し去りたくて英を殺そうとするけどそれに意味があるのか、と。英は別に西の事などどうとも思っなくて、ただ、殺されるのなら米仏日などの他国ではなく、いつか自らの手で沈ませた、(自分みたいな偽物ではない)本物の太陽に殺されたい、と。西と英は結構プラトニッククラブなどところがある気がして。因みに、黒分ではありません。というか黒分書けません。絞首ネタとかこういう殺伐としたの大好きです(爽やかににつきり)

さて、これから西英中心に今まで別のところで書いてアップしてきた小説をどんどんこちらでアップしていく予定ですので、宜しくお願います。

因みに、私は西英が本命ですがロマ英も好きですそして英受けならなんでもいけます(さらっとあとサブのサブでフェリロヴィが好きです。

以上、簡単な自己紹介でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7651v/>

感情の名

2011年10月9日13時16分発行